神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The Plays of Langston Hughes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1965-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤松, 光雄, Akamatsu, M メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1987

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ラングストン・ヒューズの戯曲

赤　松　光　雄

奴隷制度をめぐりアメリカの北部と南部がけわしく対立し，世論が沸きかえっていた1858年，逃亡奴隷 William Wells Brown は廃止論の立場から，彼自身の体験を織り込んで "The Escape, or, a Leap for Frecedom" を書いた。これはアメリカ黒人の手による最初の戯曲と言われているが，それからちようど百年たち，ニグロ問題がアメリカの運命を左右する重要な意味をもってクローズ・アップされるにつれ，ようやくニグロ作家の戯曲がブロードウェイの舞台に次々と登場し始めたのである。

そのうち，Lorraine Hansberry の "A Raisin in the Sun" (1958戯曲，1959-60上演)，Ossie Davis の "Purlie Victorious" (1961, 1961-62)，Peter S. Feibleman の "Tiger Tiger Burning Bright" (1963, 1962-63)，James Baldwin の "Blues for Mr. Charlie" (1963, 1964) 等の作品は，背景の舞台こそ北部・南部の大都市や，南部の農園と違ってはいるが，登場人物の殆んど，或いはそのすべてが黒人で，アメリカの人種問題の複雑な様相を描き，その核心にふれようとするもので，いずれも批評家たちから好評をもって迎えられ，また営業面でもかなりの成功をおさめている。

だが従来は，ニグロ俳優を使ったニグロ作家のドラマ，それもいわゆる〝黒人もの〟の社会劇がブロードウェイで上演される可能性はきわめて僅かであった。ブロードウェイに近い黒人街ハーレムの劇場（ニグロ・ルネッサンスの時期を頂点にかなりの劇場があったが現在は皆無）か，Cleveland の 'Karamu Thetre'（現在は白人劇場になっている）で，ニグロ観客を対象とする他はなかったのである。ニグロ作家が黒人乃至黒人問題をテーマにする

限り，文学的活動のジャンルは多岐にわたることが多いのであるが，詩や小説と比べて演劇の分野での作品が乏しい原因はそこに見出される。

このような条件のもとで，中西部 Missouri 州 Joplin 生まれの Langston Hughes (1982–) は，1920年代のニグロ民族のなかから盛り上った「新しい黒人」(The New Negro) の文学運動「ニグロ・ルネッサンス」の担い手として，既に自他ともに許す存在であったが，今なお劣えを知らぬ活躍ぶりを見せている。26年に処女作 "The Weary Blues" によって「ニグロ桂冠詩人」の地位を確保して以来，詩はもとより,「黒人の O. ヘンリー」と呼ばれる短篇小説を始め，長篇小説，伝記，童話，戯曲，ミュージカル台本，オペラ台本にも多彩な才能をふるい，その他ニグロ詩人のアンソロジー，ニグロ民族の歴史や民話や音楽などの著作も数多い。

1960年6月，NAACP(黒人地位向上全国協会) の大会での第45回 'Spingarn Award'[1] 受賞演説で,「私がこの賞をお受けするのは，私の詩，小説，戯曲，歌謡が生まれる素材を與えてくれた黒人の名において，また同時にながい間，私に愛と理解を與えてくれた黒人の名においてのみ，可能なのです」[2] と語っているように，ながい文筆生活を通じて，ヒューズはニグロ社会とその文化に密着した 'racial writer' の立場を固執しつづけた。彼はニグロ文化の発掘と，そのアメリカ文化への貢献を説いて，黒人に自信と誇りを植え付けようとし，白人側の偏見を取除き，現存する差別制度を打ち破ろうと，異常なほどの情熱とエネルギーを傾注してきたのである。最近ニグロ作家たちを根底からゆさぶっている自己崩壊，自己疎外の現象も，ニグロ庶民を愛し，そのなかに identity 発見したこのニグロ文学の伝統に忠実なこの抗議派の闘士を素通りして行ったのである。

戯曲の面でのヒューズは，ニグロ作家によるブロードウェイ上演の最初の成功劇 "Run, Little Chillun" が完成する1933年より数年前に，すでに「混

(1) NAACP の黒人文学賞。

(2) 橋本福夫・浜本武雄編「ニグロ・エッセイ集」(早川書房，1962) p. 263.

血児」(Mulatto) を書き上げていたのだが，中西部 Kansas 州を転々としていた幼ないころから芝居が好きで，母に連れられて地方廻りの芝居は殆んど見逃さなかったということである。詩人ヒューズの登竜のきっかけとなったのは，彼の戯曲「金貨」(The Gold Piece) が1921年の7月に当時 "Crisis" 誌を主宰しニグロ文学の育成に尽力していた W. E. B. DuBois の創刊した児童雑誌 "The Brownies' Book" に掲載され，編集者の注目を惹いたからであった。

このように戯曲についても若くから非常に関心を持っていたヒューズであるが，これまでに上演された20以上の作品のなかには，「それ故にこそ闘かう」(For This We Fight) や「ニグロ史の栄光」(The Glory of Negro History) などアメリカ黒人の闘争の歴史を劇化したものがかなり含まれているようである。ヒューズの詩や小説は海外でもいろいろなことばに翻訳されているが，戯曲だけはこれまでアメリカでも公けに出版されたことがなかった。ところが，ニグロ劇の最近の進出ぶりに刺戟されてか，5編の戯曲からなる "5 Plays by Langston Hughes" (1963) が Indiana 大学出版部によって出版された。「スコッツボロ直行」(Scottsboro Limited) (1932),「自由になりたくないのか」(Don't You Want To Be Free?) (1937),「ハイチの皇帝」(The Emperor of Haiti) (1963) は入っていないが「混血児」(Mulatto), 「リトル・ハム」(Little Ham),「天国に召された魂」(Soul Gone Home),「シンプルはすてき」(Simply Heavenly),「栄光へのタンバリン」(Tambourines to Glory) など主要な彼の作品が収録してあるので，それを時代順に一瞥してみることにする。

「混血児」(mulatto)

2幕2場の悲劇，舞台は深南部ジョージア州のプランターの居間，第一次大戦が終ってまもない頃が時代である。主要人物はプランターの白人 Norwood 氏と奴隷あがりの内妻 Cora, その間に生まれた混血児 Robert. Robert にはおとなしい混血児の兄と妹とがあるが，彼だけは容貌，性格とも，若い

ころの父 Norwood に生き写しといえるほど似通った青い眼と白い皮膚を持った多感で気性の激しい青年である。

幕が開くと初秋の午後，妹の Sallie が夏の休暇が終り寄宿舎へ帰るので，父に挨拶をしに訪れる。Cora だけはこの白堊の邸宅に住んで主人の身の廻りの世話をしているが，子供たちは他の農園労働者の黒人と同様，道傍の小さな小屋に住んでいる。Cora の切なる願いで，Norwood はいやいやながら3人の子供を遠くのニグロ大学に通わせたが，Robert の〝黒人としての分〟を守らぬなまいきな言動は，白人の父の怒りにふれ，息子が学校へ帰ることを許さず，苛酷なオーヴァシーアーの鞭で，性根をたたき直そうと思っている。Cora は〝恵み深い〟主人である父に挨拶をして裏口から出て行く。そこへ Norwood の親友でやはりプランターの友人が訪ねて来て，自分が来る途中，Robertの自動車から土ぼこりをかけられたこと，白人女性に面と向つて口答えしたことをあげて，このままではリンチも免れないから，処置するよう Norwood に訴える。畠仕事にも行かず，大切なフォードを乗り廻し，玄関から自由に出入りする過激な息子に，父は憎しみと怒りに気持が高ぶってくる。

黒人として常軌を逸する Robert の行為に，母と兄が心配して Robert をたしなめようとするが，Robert には効果がなく，逆に黒人たちのいくじのなさを責める。そして胸をはって玄関から出て行こうとするところへ，Norwood が帰って来て，裏口から出ろと命令するが，聞き入れないので，激昂した Norwood がピストルで息子を撃とうとするが，Cora がそれを制する。

第2幕1場は同じ日の夕暮時，Norwood が Robert に黒人の道を教えこもうとするが，「ぼくは私生児の黒んぼじやない。あんたの子だ」と答える。「お前のような黒んぼは木にぶらさげてやる」と言いつつ，ピストルで射ち殺そうとしてもつれ合ってピストルは床に落ちる。「なぜ殺さないんだ？」と言つて Norwood の首をしめているうちに，Norwood はぐったりとしてしまう。Cora がやつて来て気が狂ったようになる。Robert は急いでピストル

を持って逃げ，やがて父の死体が発見され騒然となる。

第2幕2場はそれから1時間後のことで，Cora 以外の黒人は，兄も使用人も身の安全を求めて逃げてしまって，誰もいない。半狂乱の母は夫の死体にすがりついて，息子を殺したのはあなただと責めながらも，息子がもう一度だけ帰って来ることを信じている。群衆の叫びがひときわ高まると，息子が駆けこんでくる。母は2階のベッドに隠れるようせかす。後を追って来た暴徒を毅然として押し止めているうちに，ピストルが鳴る。「私の息子が……眠りに……ついたのです」と群衆に云う。

「混血児」は1931年に脚本が出ている。1935年にニューヨークの Vanderbilt Theater ではじめて上演され，1年間のロング・ランを終え，ロードにかけられて1937年には西部の太平洋岸にまで達した。それまでに黒人が書いた劇のうちでは，記録破りの上演回数を重ねた。[3] 今なおアメリカでも上演されることがあるようである。この作品は日本でも翻訳があり，[4] また上演されたこともある。1950年には，ヒューズじしんの手によってこの脚本をもとにオペラ台本「障壁」"Barrier" が作られている。

ニューヨーク公演の時，作者の知らないうちに無断でリハーサルをやっていたばかりか，商業上の成功を狙って娘の Sally が幕を閉じるまで舞台をうろつき，白人のオーヴァシーアーに強姦されるというセックスをことさらに強調した筋に，台本が書き換えられていて，ヒューズの抗議も受け入れられなかったという話である。この作は彼の社会抗議の短篇集 "The Ways of White Folks" (1934) のなかの 'Father and son' に小説になっている。筋書きはこの戯曲と殆んど変らない。ただ Norwood と Cora の若き日の回想場面を通して，それぞれ農園貴族の青年と奴隷の娘として，重苦しい南部の空気の中での二人の関係をたどることにもかなりのスペースをさいている。

この劇では Robert も Cora も生き生きとしていて迫真力がある。ヒュー

---

(3) Langston Hughes, *I Wonder As I Wonder*, (Rinehart, 1956), p. 133.

(4) 木島始「ある金曜日の朝」(飯塚書店，1959)

ズが白人を主要人物に採りあげたのは Norwood が最初にして最後であるが，南部のプランターの典型人物として説得性を持っている。作者は玄関のドアを南部の峻厳な人種のおきてを表わす象徴として巧みに使って効果を高めている。Norwood の殺害，Robert へのリンチの恐怖と自殺，Cora の狂乱，こうしたセンセーショナルな要素は，Webster Smalley が述べている[5]ように，当時の南部社会の実態だったのである。だが，人種問題の悲劇をまっこうから深刻に見つめようとする作者の姿勢は，この戯曲と短篇集 "The Ways of White Folks" の数篇以外にはない。

彼の最初の自伝 "The Big Sea" に述べているように父の血筋にも母の血筋にも白人の血が流れているものの，混血児の宿命は出生のときから課せられたヒューズ自身のものであった。混血のテーマは彼の詩や小説にくり返し現われるが，"The Weary Blues" のなかの1篇 'Cross' は次のように歌う。

My old man's a white man
And my old mother's back.
If ever I cursed my white old man
I take my curses back.
....

この詩は作者自身が気に入っている詩だが，'Cross' という題目に幾重にも暗示がこもっている。苦難の道をかたどった十字架でもあり，KKKの迫害の象徴でもあり，十字路に立って迷っている姿でもある。ヒューズは若いころメキシコで堅実に暮している父から呼ばれて，アメリカでは成功の機会に恵まれないので出掛けて行くが，黒人でありながら自分の身分を嫌っている父と意見が対立し，父親にひどい憎しみを抱いて別れてしまう。かなり強い肉親憎悪の気持を父親に抱いていたようであるが，それは 'Cross' にも表われている。そして 'Cross' の「白人の父っさんを呪いでもすりや，呪いがかえってくる」という皮肉な公式が，そのままこの劇のテーマになっている。

(5) Langton Hughes, *Five Plays by Langston Hughes*, (Indiana Univ. Press 1963), xi.

Robert の反抗は，南部の黒人の境遇に対する同情や，彼らに加えられる不正への怒りによって生まれたのではなくて，白い皮膚をしたれっきとした白人の自分が，不当に黒人の扱いを受けるのは不合理だという怒りからである。問題意識に支えられた社会主義的な抗議ではないが，一家の破滅を通して，シェアクロッピング制度がいかに非人間的であるか，又それに基づいた社会慣行がいかに愚かしい矛盾であるかをこの悲劇は告げている。

「リトル・ハム」(Little Ham)

3幕の喜劇。いわゆる 'roaring twenties' の後半の華やかなりしころのニューヨーク市の黒人街ハーレムが舞台。登場人物は巡査と白人ギャングを除き全部黒人。

第一幕は主人公の Little Ham の職場である靴磨き屋。彼は小柄で，すばしっこくって，ちやっかりした，要領のいいしやれ男で，女に惚れっぽい。店のマダムはハーレムの住民たちが夢中になっているとばく「ナンバー・ゲーム」(number game)(後注) の元締 Le Roy 親分の情婦で，このゲームの受付けをこっそり引受けている。

客の1人 Mattie Bea は主人公に首ったけだが，Little Ham は店に入ってきたでっぷりと太った Tiny という別の女とたちまちいい仲になり，そして彼女の靴のかかとについていた番号で「ナンバー・ゲーム」にかける。ところが白人の私服刑事の手入れがあって，Little Ham の同僚が申込みカードを持っていたため連行される。夕方，Ham はかけの番号が当ったのを知って有頂天，そこへ親分 Le Roy が血相を変えてとびこんでくると，彼の後を追って更に白人のギャングが3人やって来て，ナンバー・ゲームの元締はおれたちの手に移ったと宣言し，Le Roy の有金を残らずまきあげるが，運よく Tiny と Ham と Madam の当り分千弗は，ギャングが払ってくれる。

2幕目は Tiny の美容院。Little Ham が恋人 Tiny に会いに来るが，Mattie Bea が客のなかにまじっていた。女2人が，主人公を奪い合いをする。

警官が踏みこんで来て，Mattie Bea を突きとばそうとした主人公が逮捕される。彼はナンバー・ゲームの新しい元締のもとで記録係に雇われていたので，親分のあだ名を一言いったら警察は恐縮して釈放してくれるのだ，そこでいろいろ言ってみるが，かえって狂人扱いされる。

3幕1場はその夜の Tiny のアパート。Little Ham を想う彼女は警察へ何度も電話をかけて親分のあだ名を言ってみるが当らない。そこへ以前の情人 Gilbert が舞踏会へ誘いにやってくる。沈んでいる Tiny は拒絶する。そこへ，裁判の場へ出てみたら女裁判官だったのでうまくまるめたよと言って Ham が来る。Tiny はとっさに Gilbert を衣裳ダンスに閉じこめていた。Tiny と Lillte Ham は衣裳ダンスに鍵をかけて，舞踏会へ連れ立つ。

さて3幕2場は真夜中。ハーレムの有名な 'Savoy Ball Room'。靴磨き屋や美容院のなじみ客の連中がたくさん来ている。Madam と Le Roy もいる。チャールストンのコンテストが始まる。踊り手たちがふるいにかけられて行って，最後に喝采を浴びて Ham と Tiny 組がトロフイを獲得する。そこへどうして抜け出したのか殺気だって Tiny を追って来た Gilbert と Little Ham へのしっとにかられた Mattie Bea が現われる。この二人顔を見合せてけげんな顔をして，その場をとり繕うとする。二人は夫婦だったのだ。めでたくもとのさやへおさまって踊り出す。一方主人公のカップルも手をとり合って踊りながら結婚を約束し，美容院を経営しようと明日の夢を語り合う。

これは「混血児」から4年後の1935年の作である。「混血児」の北部ハーレム版を期待した読者はすっかり肩すかしを喰わされるであろう。そそりたった南部の差別の壁への挑戦が，いたずらに身の破滅を意味するものでしかないことを知って，戯曲でヒューズは二度とその撤を踏もうとはしなかった。救いようのない南部の農園の暗さのなかで，自分と周囲をじっと見つめた真剣な Robert の姿は跡方もなくなって，北部大都会の片隅で，浮草のようなその日暮らしではあるが，まったく屈託のない陽気さで，金と女を追いかける浅薄な Little Ham と変ってしまった。不況の風に曝されていた作者自身

が，恐らくしきりに懐旧の念にとらわれて「ジャズの時代」の寵児ともてはやされた頃のハーレムその妖しい魅力に，白人たちがどっと吸い寄せられていた頃のハーレムを再現しようとしたのであろう。或る日のそうしたハーレムの断面を切り取って観客に見せてくれる。

ハーレムの風俗を描くため，靴磨き店と美容院という客の出入りの頻繁で，人情の機微に容易に触れられる場所を選んだ作者は，さまざまな人物を登場させる。俳優や寄席芸人，社会事業や新興宗教の婦人役員，行商人や浮浪者などなど，総数40人近くが次々と現われ，賭けの話や舞踏会の話，のろけ話や世間話をかわしたり，口論やとっ組み合いをさせる。

ストーリーはナンバー・ゲームをめぐって展開するが，この賭けごとは他に託しようのない黒人の唯一の希望と夢として扱われている。大金を当てて結婚資金にしょうとする主人公ら，一獲千金の夢破れて，「どうしても当らない，最後の1セントなのにさ，当らないんだよ，ガスに火をつけるマッチを買えと言って娘がくれた金なのに」と泣いて訴える老婆，"The Weary Blues", "Shakespeare in Harlem", "One Way Ticket" 等の詩集で，詩人ヒューズがハーレムの庶民たちを深い愛情と理解をもって描いたのと同様に，無智で放縦な黒人大衆の中に，すっかり没入し，溺れきったままで彼らを描いている。類型や象徴ではない黒人の生態が躍動しているのは，そのあたりに原因がひそんでいるようである。ふしだらなハーレムに宗教や道徳を持ち込んで矯正しようとする人物は，ヒューズは皮肉たっぷりにこらしめられる。Le Roy 親分の扱いに見られるように暴力に対しても，腐敗や無智や貧困に対しても，一切の抗議はない。

ハーレム住民たちの生態は見事に描かれて風俗劇としては成功であるが，過度に観客を意識して，無理に笑わせようとするところが随所にあって，喜劇としては通俗作品に終っている。靴磨き屋で客どうし口論の果てにピストルで撃ったり，衣裳ダンスに閉じこめられた Gilbert が同じようにピストルを撃つ場面など，安っぽい活劇の見せ場を作ったことは，この時代の暴力を

戯画化した諷刺とも見られようが，むしろ劇場側との安易な妥協と考えるべきであろう。

この脚本を書いた2年後に，ヒューズはハーレムに劇団 'Suit Case Theater' をつくり,「自由になりたくないのか」(Don't You Wan't To Be Free?) を書いて自分で監督し，135回というハーレムでは記録破りの上演数をかさね，ロスアンジェルスでも30回以上上演したのだが，この脚本は入手できない。「天国に召された魂」(Soul Gone Home) は同じ年の1937年に書かれたごく短かい一幕劇である。結核で死んでしまった息子のそばで母親が悲嘆にくれていると，成仏できない死体がにわかに口をきいて，母の生前の仕打ちをなじりだしたので，母は嘆きもどこえやら口やかましくやり返し始める。そこへ市当局の白人の死体運搬車の音が聞こえて来たので，せきたてられた息子の魂が死体に戻る，というほとんど二人の対話だけからなっている劇である。幻想的なイメージと，母子のいがみ合うことばの行間には，白人に生殺与奪の権を握られて，抜き差しならない環境への怨嗟のひびきがこめられている。

「シンプルはすてき」(Simply Heavenly)

2幕18場のミュージカル・コメディで時代は第二次大戦後の現代。舞台はやはりハーレム。Semple, もっぱら Simple と呼ばれる主人公は平々凡々な貧乏な青年で，だれからも愛される性格の持主。まじめで誠実な Joyce は Simpleの恋人。この二人のアパートと，ハーレムの一隅にあって界隈の住民たちの憩の場，社交の場 'Paddy's Bar' を主な舞台にして物語りが展開する。

Simple は5年前から別居している妻と別れて Joyce と結婚したいが離婚に必要な金がない。ところが妻に新しい男ができ，離婚費用の400弗を全部払ってくれるという妻からの手紙に，喜んだ Simple が Paddy's Bar へ行く。白人家庭の女中 Mamie, 彼女にいつも云い寄る西瓜売り Melon, 17人の子持ち Bodiddly 夫婦，主人公の隣人で，親友の Boyd らが来ていて Simple の

幸運を祝って乾杯する。そこへ魅力的な浮気女の Zarita が酔っぱらって現われて，いやがる主人公をドライブへ誘い，交通事故にあって Simple は脚を折って入院する。Joyce は Simple の浮気のせいだと信じこみ，二人の仲にひびが入ってしまう。退院した Simple が 'Paddy's Bar' でみんなに祝福されても気が晴れない。Joyce のことと,「インフレで離婚費用全額は払えないから，当事者めいめい3分の1ずつ受け持つことにしたから頼む」という再度の妻の手紙が原因である。

1ケ月たって，憤った催促状がまた舞い込んだ。目ぼしい持物を質入れしてもまだ足りないので，親友 Boyd に借金を頼むがことわられ，黒人の英雄 John Henry の話を例に勇気を出して働くよう激励される。やがて仕事に精出した甲斐があって離婚費用の分担金をすっかり払い終え，たえず誘惑しようとする Zarita とも絶交を申し渡した Simple に， Joyce の気持もほころび始め，たまたま失職するが，Joyce は温かくなぐさめる。

或る日，誕生日を迎え酔っぱらった Zarita が失職中の Simple をなぐさめようと，大勢の人間をつれてアパートを訪れ，乱痴気騒ぎをはじめる。いやがる Simple に無理にキスしようとするところへ Joyce が来てしまった。それ以後あらゆる手段で Joyce の誤解を解こうとするがとりつくきっかけもない。Simple の落胆を見るに見かねた Boyd が Joyce のアパートへ行って事情を説明し，やっと彼女の怒りがおさまる。離婚証書が届きはれて結婚できる Joyce に嬉しいことが重なって，戦時から平時態勢の産業転換で職にも有りついた。

「シンプルはすてき」は1953年の作で，1956年の8月から翌年にかけてブロードウェイの Playhouse Theater で上演されている。題名の Simply Heavenly は主人公の俗称を,「とってもすばらしい」という意味にかけたものである。ヒューズはアメリカで最大の発行部数を持つニグロ週刊紙 'Chicago Defender' に,「シンプルもの」と呼ばれる読み切りの短篇をながい間連載し，それが単行本 "Simple Speaks His Mind" (1950), "Simple Takes a Wife" (1953),

"Simple Stakes a Claim" (1957) となって出版されている。"The Best of Simple" (1961) はこの三書のなかからヒューズ自身が選んで一冊にしたものであるが，その「まえがき」で,「ハーレムに住んで，少くとも50人の Simple, 50人の Joyce, 25人の Zarita, 大勢の Boyd ... に会わずにいることは不可能です」[6] と言っている。ヒューズはハーレムの町のどこにでもいそうな黒人に，黒人全体のなかにひそんでいると思える純粋さ，飾り気のなさ，素直さを附与して，Simple の像を彫りあげたのである。ヒューズの創造した Simple は諸外国に好評を得ているようで，作者自身のことばを借りると「色の黒いハーレムの住人〔Simple〕が，ハーレムの 125 丁目レノックスの一隅から何千マイルも離れた外国で，世界中のあらゆる人種の下積みの男の問題の象徴として受入れられている」[7] と言い，また Simple が世界の国々で受入れられている理由を「それは世界中のどこでも貧しい人びとがいて，経済的は問題があり，また世界中の殆んどの国々に，ある種の人種問題が存在しているからなのです」と言っている。

黒人大衆の集約的な人間像 Simple を作り，Simple を人種的差別への抗議の代弁者の役割を与えたのであるが，「混血児」から20年以上へて書かれた「シンプルはすてき」の抗議は，新進女流劇作家の L. Hansberry が,「Simple はわたしがこれまで聞いた文学上の他のどんな人物よりも，Shakespeare の wise fool と同質だと思います」[8] と語っているように，諷刺や，アレゴリーや，パラドックスに，鋭利な鉾先を包みこんでいる。劇中で，17人の子持ちの Bodiddly の息子の一人が兵隊にとられる。軍隊と聞いて空想癖のある Simple は，自分が白人部隊の隊長になって指揮をとり，突撃させ，帰還の暁には自分の手で白人兵に勲章を渡すという夢想にふける。劇の中ではないが，南北戦争百年祭を迎えた時，ヒューズが Simple の空想を借りて，奴隷制を意義

(6) Langston Hughes, *The Best of simple*, (Hill & Wang, 1961), vii.

(7) 第45回スピンガーン賞受賞演説より。橋本福夫・浜本武雄編「ニグロ・エッセイ集」(早川書店，1962) p. 266–267.

(8) Mathew N. Ahmann (ed.) *The New Negro*, (Fides Pub. 1961), p. 124–125.

深くするために，黒人を主人に白人を奴隷にしたらと痛烈な提案をしている[9]のも同巧の発想である。

人種問題への言及は各所に現われる。Simple が "This great big old white ocean — and me a colored swimmer" といったような台詞を吐いて，貧乏なのは黒人であるからだと，しばしば Boyd に訴えるが，Boyd は人間だれしも問題があるのだ，黒人を弁解の口実にして嘆き悲しむのは止せとさとされる。この辺にヒューズの人種問題への態度が顕著に窺えるのだが，それは別にして，この主人公らしからぬ主人公が「泣くまいとして笑おう」とする生活態度はこの作品の基調である。けちんぼなアパートのおかみは，真冬にスチームも通さない。家賃も払えないので無理も云えぬ。階下のおかみにヒーターをトントン叩いて催促するが，トントンと下から，同じ返事がかえってくるばかり。そこで部屋で香をたき，においをかいで首を出す Boyd に，震えながら，こうすると少しは暖かいだろう，それに気が紛れるしと答える。「リトル・ハム」とは異質なしみじみとした笑いがある。

"Simply Heavenly" は "A Comedy" と銘うっているが，第1幕に4篇，第2幕に7篇と歌がちりばめられているから，ミュージカル・コメデイと定義づけるべきであろう。ストーリーに必然的な役割を持たない "Mamie と Melon が登場し，Mamie に想いを寄せる Melon と云い逃れようとする Mamie のやりとりは殆んど歌で交される。それに Simple と Joyce の掛け合いに歌をしばしばうたわせる。前述したようにヒューズはミュージカルやオペラの台本を数多く書いた作家で，"Ask Your Mama: 12 Moods for Jazz" (1961) のようにジャズを伴奏にした実験的な詩集を書いたり，「混血児」をオペラ化したほどの人である。音楽劇の価値は現実の舞台を通して鑑賞しないと分らないが，脚本を読んだ限りでは，ジャズ，ブルース，ワーク・ソングなどが効果的に使われている一方，かなり通俗的な歌詞もまじっていて，主人公たちの甘い恋を強調するようなところが多い。ブロードウェイのニグロ

(9) *ibid.*, p. 1221–122.

劇への閉鎖的な態度を，ヒューズは「プロデューサーは面と向ってあけすけに，『ニグロの芝居はもういらない，市場向きではないから売れない，お客さんが来ないからね』」[(10)] と言っているが，上演されるためにはやむを得なかったのだろう。それに全体の劇的な構成が平坦でクライマックスが弱いのは，"The Best of Simple" からそれ自身半ば独立したエピソードが選択されて，殆んどそのままの形で劇の骨組みが作られているためで，これがもう一つの難点である。

「栄光へのタンバリン」(Tambourines to Glory)

2幕13場の現代のハーレムの物語り。家賃を滞納しアパートから追立てをくった Essie が街角で，途方にくれているところへ，旧友の Laura が酒に酔ってやって来るのに出会う。Laura の思いつきで，幸い説教と歌の得意なこの二人の中年婦人は，'Reed Sisters' と名乗って，キリスト教会を開こうと相談する。

早速つけで聖書を買いこみ，賑やかな「レノックス大通り」で，ゴスペル・ソング（福音歌）を歌ったり，タンバリンをふりまわす鳴物入りの説教で「われわれの教会はこの街角，屋根は神の空，この教会はドアがないからだれでも入れる」と勧誘して，たんまりタンバリンのなかに寄附をせしめる。Laura は悪魔の化身 Buddy と Bar で知り合い，彼の不思議な魅力にたちまち夢中になる。Buddy は Laura に入れ知恵をするが，それはただの水道の水をヨルダンから取った聖水と称して会衆に売り付けたり，聖書の章句をナンバー・ゲームに利用したりして金を捲き上げようとすることだった。こうして教団はだんだんと繁昌し，Essie と Laura の生活も豊かになって行く。

地味で謹厳な道徳家の Essie は，恵まれないハーレムの黒人とその子供に就職斡旋所や遊戯場や保育所を建てようと真剣に考えるが，反対に派手で享楽的な Laura は毛皮のコートやキャディラック，それに Buddy への豪華な

(10) *ibid.*, p. 114.

プレゼントと，物質的欲望に魂を奪われている。そこでしょっちゅう衝突のたえまがない。Essie は純真で美しい一人娘の Marietta を南部から呼び寄せる。娘は教会の「聖者」の一人である C. J. 青年と恋におちるが，女たらしの Buddy が Marietta に目をつけ，手込めしようとするが，この娘だけは摩力も通じない。Laura はそうした Buddy を心から憎み手を切りたいと思うのだが，肉体が云うことを聞かず悩んでいる。

だが遂に破局がおとずれた。教会の控室で，女をからかったり自分の財布から金を盗ったと Laura から責められた Buddy が，逆にひどい雑言を吐いて散々に暴力をふるったあげく，抱き寄せようとする。思わずそばにあった Essie のナイフで Buddy を刺し殺してまう。殺人容疑で逮捕されたのは Essie の方だった。けれども罪の苛責に，Laura は犯行を自供する。Essie は Laura の罪を暖かく許してやる。ゴスペル・ソングを合唱している教会へ，正当防衛と認められて保釈で出獄した Laura が現われ，罪深い身を歌でざんげし，Marietta と C. J. の結婚式が挙げられる。

1958年，同じ「栄光へのタンバリン」という名の小説が出版された。この戯曲の生まれたのはその前年である。1957年からしばしば上演されたようだが，近くは昨年の11月ブロードウエイにかかっている。

作者は脚本に付けた「作者覚え書」のなかで『「栄光へのタンバリン」の意味は多分に，その歌にあるのだから，Laura と Essie はともに歌える女優でなければならない……幕が下りたとき，一つの歌——施律の美しい，好ましいドラマチックな歌を聴いたという印象が最終的な効果でなくてはならない』と書いている。この戯曲が完成したときに，ヒューズが福音歌手 (gospel singer) の第一人者 Mahalia Jackson を主役にと望んだ ("Jet" Oct. 3, 1957) のもうなずける。ふんだんに音楽が盛りこまれ，讃美歌，及び古くから伝わる黒人霊歌 8 曲，それにヒューズが作詞し， Jobe Huntley が作曲した少数のジャズ，ブルースと，福音歌が全部で17曲歌われるが，前作と異なり，ニグロ文化の誇るこれら黒人霊歌や福音歌が，劇の中に見事に融合して，効果

的である。

今日ハーレムでは，アメリカ黒人のおかれている立場を反映して黒人大衆の間に大小さまざまの宗教団体が存在している。隠然とした勢力をもつ「黒い回教団」から信者わずか4，5人の狂信的な教団に至るまで24，5の宗教団体に約5千の信者が所属している。[(11)]「栄光へのタンバリン」はハーレムに数多いニグロ・キリスト教会を題材に選び，例えば教会内部の壁画のアダムを茶色の肌のボクサー Joe Louis, イヴを褐色の歌手 Sarah Vaughn, 日曜学校用のカードの天使を黒く描いたりして，ニグロ民族への共感と独特のユーモアをこめて，新興ニグロ教会の民族主義的な特徴を浮び上らせながら，その欺満性をついている。

けれどもこの中心テーマはもちろん善と悪の問題である。2幕ともプロローグがあって，Buddy が登場し，自分は悪徳の権化でこれから神に挑戦するのだと，道化じみた親しみ深い口調で饒舌に観客に呼びかける。「作者覚え書」に「登場人物はすべて Buddy は別だが愛すべきように演じなくてはならない」と指示を与えている。冷酷な悪人はヒューズの劇では登場しない。前口上で生き生きとした Buddy は，メフィストフェレスの役割を具現しようとするとたんに，精彩を失ない，平凡な悪玉にしか過ぎなくなってしまう。だが，彼の誘惑に最後まで引きずられる Laura と，平凡だが誠実で，信仰に生きんとする Essie の両主人公はどちらも，強い個性を持った，血の通った人物に創造されている。ハーレムのニグロ教会から題材を借りたが，ヒューズはニグロ教会を諷刺するとともに，その良さを巧みにこの劇に撮り入れている。教会自体のもつ素朴な善悪の解釈を織り込み，平易な説教を二人の人物に語らせ，熱狂的な雰囲気をニグロ音楽によって高めている。それがこの劇を単にミュージカル以上の魂の救済を扱った宗教劇として成功させている理由であろう。

---

(11) E. U. Essium-Udom, *The Nationalist Movement of Harlem*, "Freedomways" Summer, 1963, p. 335

ヒューズのこれら主要な戯曲4篇のうち3篇までが，執筆の時期と前後して小説となって出版されていることは，ヒューズの多芸多才ぶりを示す一端であろう。恐ろしいほど多作のヒューズは，彼の詩や小説では，すぐれた作品も多い反面，駄作もかなりふくまれているようである。しかしこれらの代表的な戯曲は，悲劇「混血児」でも，その他の持味のちがった主人公がそれぞれ登場する喜劇でも，読者を飽かせることがない。人種問題への深刻なアプローチを絶った作者は，もっぱら大都会のニグロ庶民たちの哀歓を描くことに終始した。

貧困と悪徳の淵に浮き沈みしているニグロ庶民たちに，ヒューズは限りなく民族的な共感と信頼を寄せ，彼らの人間的な脆さはすべて暖かく抱擁しようとする。都会の黒人の生活を描くと，こうした態度を基調にしてヒューズは独自のユーモラスな世界を生み出す。作者は常々ニグロ文化の発揚を主張しているが，深い理解をこめて黒人のフォーク・ミュージックを劇中に消化しようとする。「栄光へのタンバリン」はこの試みが成功した例で，フォーク・プレイの傑作と云えよう。

黒人作家による戯曲のなかで，ブロードウエイにかけられた作品はヒューズのがもっとも多い。それは彼の劇の芸術性は別として，作品が比較的その舞台に受入れられ易い無難なものであったのが一つの理由である。だが，「リトル・ハム」「シンプルはすてき」のように観客を楽しまそうとするあまり，作品としての価値をいくぶん損ねている感があるのは，黒人作家のおかれた立場を物語っているものの，遺憾なことである。

ヒューズは多年にわたって脚本を書きつづったばかりでなく，ニグロ演劇の興隆を目指して，ハーレムを中心に演劇運動を指導し実践してきた。それがいま実を結んで，ハーレムの若い劇作家や舞台人のあいだに，活潑なニグロ演劇活動が展開されようとしている。(12) このハーレム・グループの人びとがヒューズを踏み台にして飛躍する日は遠い将来のことではあるまい。

(12) Jim Williams, *The Need for a Harlem Theatre*, "Freedomways" Summer, 1963, p. 395.

〔後註〕

The most popular gambling game in New York City, and especially in Harlem, is the numbers. The poorest, most miserable creature alive can play. To try his luck, all he needs is a penny, and if his guess is right the numbers bank will pay him six dollars in return. The odds against his winning are a thousand to one, and his payoff is only 6 hundred to one, but this disparity is somewhat compensated for by the comparative ease with which he can play this supposedly illegal game. L. Hughes & A. Bontemps (ed.), *The Book of Negro Folklore*, (Dodd, Mead & Co., 1958) p.p. 206–207.